

一年	国語	Gアップシート	読む1
----	----	---------	-----

組	番・氏名
---	------

## ★小説を朗読しよう

◇小池さんの学級では、グループで作品を選んで朗読を工夫し、交流することになりました。小池さんのグループは次の小説を選び、朗読することにしました。

【ここまでのあらすじ】  
 保育園年長組の柘介は、保育園の行事である夏祭りに参加していた。夏祭りではアトラクションの一つにお化け屋敷があり、柘介は友達の人人と一緒に入ることにした。



外を見ると、先生達が花火の準備をしているのが見えた。夜になると親たちがやってきて、一緒にご飯を食べたり遊んだりすることになっている。柘介の家ではお父さんが来ることになっていた。それまでにお化け屋敷の中に入っていないと困ったことになる。もし入っていないければお父さんはからかうに決まっている。「相変わらず恐がりだなあ」と言うのが目に見えるようだ。家の中で言われる分にかまわないが、保育園で言われるのはちよつと、というよりかなり恥ずかしい。それだけは避けたい。恥ずかしさと怖さのどちらが我慢できるかといったら、まだ怖さの方がましのような気がする。気がするだけだが…。

「いっつか。」

柘介は隼人の手をぎゅつと握った。入り口は段ボールを重ねたものに色画用紙を貼って、ちよつとお化けっぽい感じの絵を貼り付けた程度のも。幼児の自分にだって子供だましたとわかる。しかし、柘介にはひどく恐ろしい、地獄の入り口のように感じられた。出口はたった十メートルほど先なのに、遙かに遠く感じる。やめようかな。今ならまだ引き返せる。そう思いながら振り返ってホールを見た。ホールではすでに入り終わった子供たちが遊んでいるが、平気な顔でふざけているもの、涙をこらえているもの、こらえきれずに大泣きしているものなど様々である。なつちゃんの顔を見た。まだ目に涙を浮かべている。彼女にかっこ悪いところは見せられない。柘介は覚悟を決めた。

「手、離さないでね。」

隼人の声は聞こえたが、言われなくても離す気はなかった。

入り口は小さいが、六歳の二人には十分な大きさである。悪魔の口に飛び込むようで足が震えたが、思い切って入って行った。思った通り、中は薄暗い。見慣れているはずのステージ裏の置き場を何でこんなに恐ろしくするんだ、誰がやったんだ、と半分やけくそな気持ちになりながら、暗い場所に慣れしてきた目であたりを見た。このお化け屋敷でクリアしなければならぬ課題は、三つのお化けを探し、

その『証拠』を取ってくるのである。他の子の取ってきたものを見ているから、『証拠』が折り紙で作ったお化けの人形なのはわかつている。問題はどこにあるかだ。先生たちのすることだから、きつとどこかの箱の中に入っているに違いない。そしてその箱は恐いお化けの絵の近くだ。あたりを見渡すと、案の定、いかにも恐そうなお化けの装飾のそばに、スイカがすっぽり入りそうなほどの大きさの箱が三つあった。近づいてよく見ると、箱には片手の入りそうな穴が開いている。おそらくこの中に手を入れて『証拠』を取れということなのだろう。

「これ、手を入れるの？」

隼人が弱々しく口を開いた。こんなにあからさまに置いてある箱だ。中に『証拠』が入っていて、それを取らなくてはならないことぐらい彼もわかっている。それでも口に出して確かめたいほど、箱の中に手を入れるのは勇気がいることだと感じられた。

「あつたりまえだつて。早く取つていこうよ。」

柘介はあえて平静を装つて言った。暗くてよく見えないが、手が震えているような気がする。ホールでベソをかいている子たちの気持ちがよくわかる。やっぱりなつちやんと一緒に来なくて良かった。柘介は意を決して箱に手を入れた。なかなか奥の方まで手が入らず、少し慌てた。頭の中を真っ白にしながらい切つて探ると、何か手が手に触れたように感じる。大急ぎでそれをつかみ、箱の外に引張り出した。見ると、思った通り、青い折り紙で作られたお化けの人形である。恐そうな雰囲気顔が描いてあるが、全く恐く感じない。なあんだ、こんなものか。柘介は背中にじっとりとした汗を感じた。そういえば今は夏だった。セミの鳴き声が、突然柘介の耳の中に飛び込んできた。

(高橋智子「夏空」より)

一年	国語	G アップシート	読む1
----	----	----------	-----

組	番・氏名
---	------

## ★小説を朗読しよう

問一 小池さんは「案の定」という言葉について辞書で調べたところ「思ったとおり。予想したとおり。」という意味だとわかりました。これを参考にして、この場面では何が「案の定」なのか、次のア〜オから一つ選びなさい。



【語句の意味を理解し、想像力を働かせて文章を読む】

- ア お化けの装飾そうしやくの近くに箱があったこと。
- イ スイカが入りそうな大きさの箱だったこと。
- ウ 箱には片手の入りそうな穴が開いていたこと。
- エ 『証拠』しんこうしが折り紙で作ったお化けの人形だったこと。
- オ 恐こおくて泣きそうになってしまったこと。

問二 やっぱりなつちゃんと一緒に来なくて良かった。とありますが、終介がそう考えたのはなぜですか。最も適当なものをア〜エから一つ選びなさい。

【朗読するために、登場人物の心情や行動に注意して読み、内容の理解を深める】

- ア なつちゃんに気を取られて、お化け屋敷やしきを楽しむことができないと考えたから。
- イ なつちゃんは目が悪いので、暗いお化け屋敷の中は危険だと考えたから。
- ウ 自分が恐くて震ふるえている様子を見られたくないと考えたから。
- エ なつちゃんと一緒だと心強いので、怖こおさを感じたのではないかと考えたから。

問三 セミの鳴き声ななきこゑが、突然終介の耳の中に飛び込んできた。という文は、間接的に終介の心情を表現しています。どのような心情を表現していると考えられるでしょうか。ア〜エから一つ選びなさい。

【朗読するために、情景描写に注意して読み、内容の理解を深める】

- ア 隼人はやとと一緒に来たことにより、お化け屋敷への満足感が減ってしまったこと。
- イ 証拠があと二つ必要なため、お化け屋敷への怖さが増していること。
- ウ 証拠が折り紙の人形だったため、お化け屋敷への期待感がなくなったこと。
- エ 証拠を一つ手にしたことにより、お化け屋敷への怖こおさが薄うすれたこと。

問四 朗読する際、この文章の特徴に対する考え方として最も適当なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

【朗読するために、文章の表現の特徴や効果をとらえる】

- ア 主な登場人物が二人しか描かれていないため、二人の心情に注意して、それぞれの個性が出るように表現する。
- イ 柘介に寄り添った視点で描かれているため、柘介の心情の移り変わりに合わせて、地の文の表現も変えていく。
- ウ 会話をきつかけとして物語が動いているため、それぞれの会話を区切りとして、表現の仕方を変えていく。
- エ 保育園の幼児を主人公としているため、幼児らしい雰囲気（ぶんいき）を大切に、文章全体を幼い子供が話すような調子で読む。

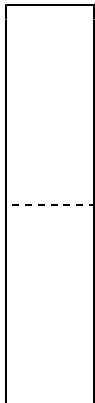
◇小池さんはグループの仲間に朗読を聞いてもらい、意見をもらいました。

問五 グループの仲間から次のような意見がありました。ア～オの意見の中で、この文章を朗読するにあたって適切な意見を二つ選びなさい。

【朗読するために、文章の表現の特徴や効果をとらえる】



- ア 最初は緊張（きんちやう）感に包まれていた柘介の気持ち最後の場面では解放されているので、最初は暗い雰囲気（ふんいき）で、最後は明るい雰囲気（ふんいき）で読んだほうがいいよ。
- イ お化け屋敷の外は明るいわけだから、入る前は明るく読んで、入った後は暗く読んだらもっと雰囲気が出せると思うよ。
- ウ 全体的にお化け屋敷への恐怖（きょうふ）をイメージして弱く読んで、なつちゃんにいいところを見せてたい気持ちの部分だけ強めに読むといいんじゃないかな。
- エ お化け屋敷に入るときに覚悟（かくご）を決めてるんだから、入る前の部分は弱く読んで、入った後は力は強く読むといいよ。
- オ セリフと地の文をしっかり分けて、セリフは心情が伝わるように、地の文は抑揚（よくよう）をつけずに淡々と読んだ方がいいと思うな。



【読む1 小説を朗読しよう】

問一 ア 問二 ウ 問三 エ 問四 イ 問五 ア、ウ

解説

問一 新しい言葉を知ったら、使ってみることで自分のものになります。辞書で調べる時には用例も一緒に見て、自分の生活で使える場面がないか考えてみましょう。

問二 登場人物の心情を考える時には、その前の部分の行動や心情の描写に注意して現在の心情を考えましょう。その際にはその人物の心情や行動に線を引き、整理しやすくなります。この場面ではお化け屋敷を怖いと感じている感情をふまえてのもので、(ア)が答えになります。

問三 情景描写から心情を考える時には、その情景がどのようなイメージで描かれているかを考えることが必要です。明るい・暗い等、プラスイメージなのかマイナスイメージなのかから考えていき、具体的な心情に近づいていきましょう。この場合はセミの声が聞こえたのは柘介が落ち着きを取り戻したからと考えられます。また、「突然」という表現から、心情が大きく変化していることもヒントになります。

問四 文章の特徴を考える際の考え方の一つに、地の文の表現の仕方があります。地の文の話者が

①登場人物(私は〜と思った)

②登場人物以外(太郎は〜と思った)

のどちらなのか。そしてそれが登場人物以外であれば、誰かに寄り添って固定された視点なのか、特に誰かに寄り添わずいるんな場面に移動する視点なのかを考えてみましょう。それによって作者の表現の意図が見えてくる場合があります。この文章は柘介に寄り添った視点で描かれています。

問五 文章全体で作られているイメージも朗読の参考にします。全体を通して柘介の恐い気持ちが表示されていますが、時々前向きな心情も混ざってくるのでそれに合わせて読み方を工夫しましょう。各部分の心情のみに注目すると、全体としてのまとまりが感じられなくなります。